

目次

第1章 計画の基本的な考え方

- 1-1 計画策定の背景 P. 1
- 1-2 計画の位置付け P. 2
- 1-3 計画期間 P. 2
- 1-4 本計画の対象区域 P. 2

第2章 面河溪の概況

- 2-1 旧面河村の概要 P. 3
- 2-2 面河溪の位置、自然(地質・植生等)..... P. 7
- 2-3 面河溪の歴史 P. 9

第3章 面河溪観光について

- 3-1 面河溪観光の歴史 P. 11
- 3-2 面河溪観光の現状 P. 12
- 3-3 面河溪への観光客からの意見 P. 17

第4章 面河溪再整備に向けて

- 4-1 面河溪観光の目指すべき姿 P. 22
- 4-2 面河溪再整備に向けたアクションプラン P. 24
- 4-3 プラン1 エコツーリズム・交流の拠点となる施設の整備・運営 P. 26
- 4-4 プラン2 エコツーリズムプランの造成、ネイチャーガイドの育成 P. 34
- 4-5 プラン3 久万高原町・面河エリアの産品を活用した「食」、「お土産品」の開発... P. 37
- 4-6 プラン4 周辺環境の整備 P. 39
- 4-7 面河溪再整備の KPI P. 42

第5章 推進体制 P. 43

第1章 計画の基本的な考え方

1-1 計画策定の背景

久万高原町(以下「本町」という。)では、平成28(2016)年3月に策定された「第2次久万高原町総合計画」において、魅力ある産業づくりを重要課題として掲げ、その中で観光面においては、「高原ブランドの確立による一体的な観光振興により、交流人口増加を図る」ことを基本方針としています。また、観光施設の老朽化やインバウンドへの対応といった、観光振興における様々な課題に取り組んでいくうえで、戦略的な計画に基づき、施策を行う必要性があります。

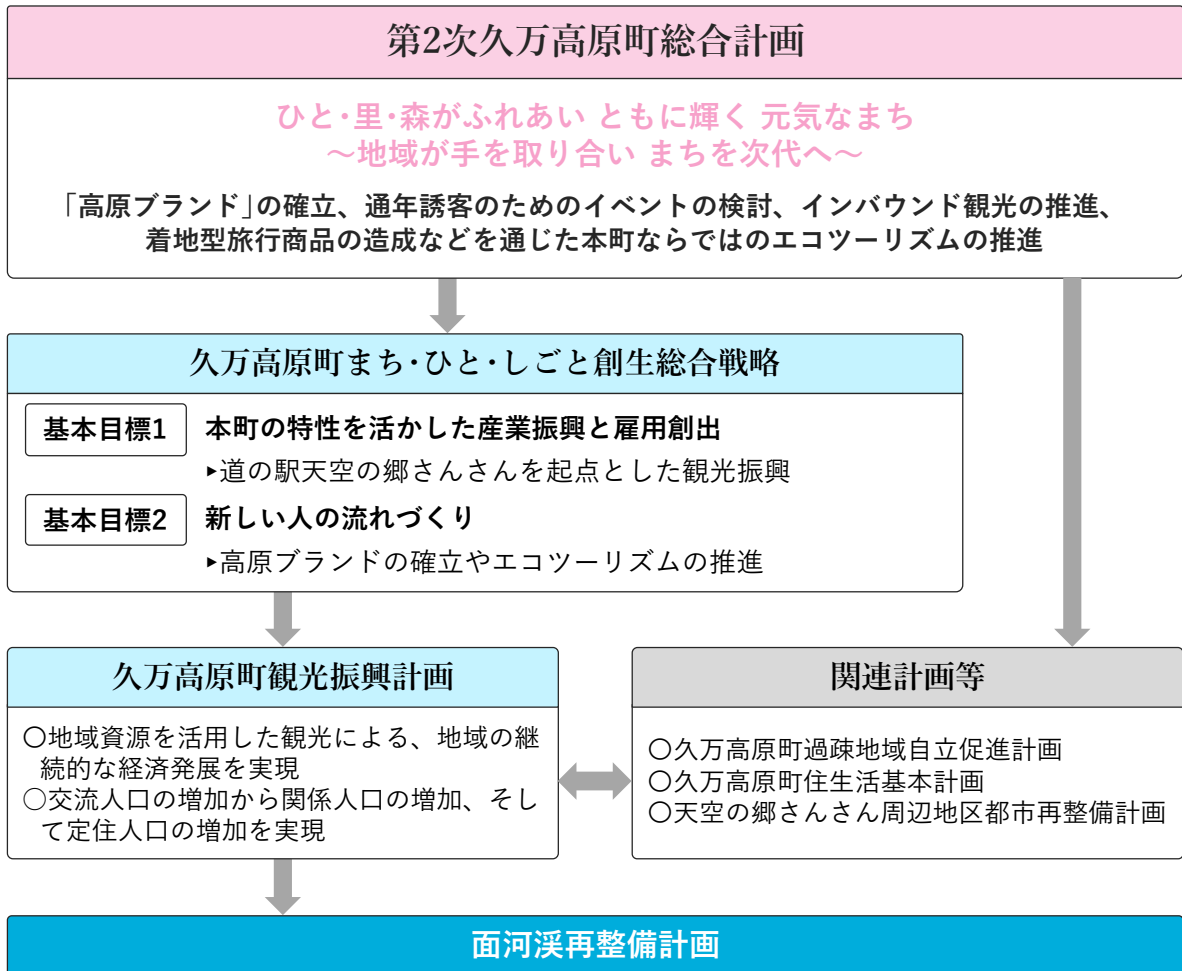
そのような状況のもと、本町の有する可能資源の魅力や課題を分析し、本町の観光における今後の方向性や目指すべき将来像、町民や観光関係機関、行政など、それぞれの担うべき役割や目標などを定めた、本町の戦略的な観光振興の指針となる「久万高原町観光振興計画」を策定しました。

面河溪再整備計画(以下「本計画」という。)は、本町観光の一翼を担いながらも、施設や設備の老朽化などが著しく、早急な対応が求められる「国指定名勝・面河溪」を対象に、魅力ある観光地として再生するための方向性を定めたものです。

面河溪再整備計画

1-2 計画の位置付け

本計画は、本町のまちづくりにおける最上位計画である「第2次久万高原町総合計画」に定められた基本方針のもと、「久万高原町まち・ひと・しごと創生総合戦略」、「久万高原町観光振興計画」を上位計画として、国指定名勝・面河溪の再整備の方向性を定めます。



1-3 計画期間

本計画の計画期間は、2019(平成31)年度から2028年度までの10年間とします。なお、計画期間中には、社会を取り巻く情勢や経済環境が大きく変動し、観光市場の動向や人々の観光に対するニーズは刻々と変化していくことが想定されるため、3年間など一定の期間を定め、計画の進ちょく状況を確認しつつ、本計画の内容を適宜、見直していくものとします。

1-4 本計画の対象区域

本計画の対象区域は、久万高原側の「石鎚スカイライン」入口付近から面河川沿いに、石鎚山に至る一帯である。

第2章 面河溪の概況

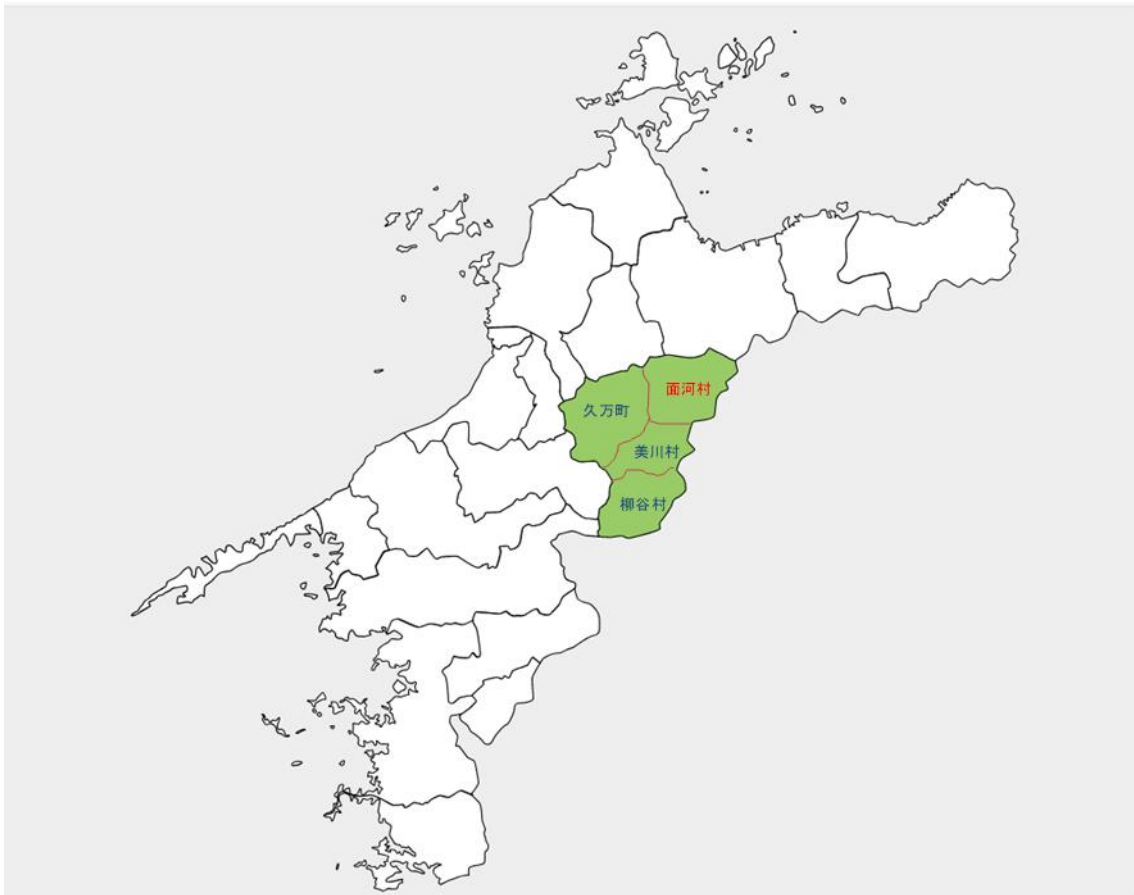
2-1 旧面河村の概要

面河溪は、2004(平成16)年の町村合併により廃村となった面河村(おもごむら)に位置します。面河村は愛媛県の中中部、上浮穴郡の東端にあった村で、石鎚の聖流郷をキャッチフレーズとして観光に力を入れてきた山村です。2004年の町村合併で上浮穴郡久万高原町となり、自治体としての面河村はその歴史を閉じました。

2-1-1 位置・地形

旧面河村は、愛媛県の中中部に位置しており、高知県と接していました。西日本最高峰の石鎚山をはじめとする山々に抱かれ、面積の95%を森林が占め、急傾斜地が多いという特徴があります。村の中央を、石鎚山系から発する面河川と割石峠に源流を発する割石川の2つの河川が南に流れ、通仙橋付近で合流し、やや西向きに流れを変えて、隣の旧美川村に達します。その後、支流を集めつつ、旧美川村、旧柳谷村を経て高知県に入り、仁淀川となって太平洋に注いでいます。

平均気温は11度から12度で、12月から3月にかけて降雪があります。



面河溪再整備計画

2-1-2 村名の由来

面河村の村名は、1934(昭和9)年の改称の際に、面河溪を生かして観光に生きたいという思いから名付けられました。面河という地域の名がいつの頃か使われていたか、また、その由来は定かではありませんが、寛保年間の文書に「面川山」という記載があり、「面川」が「面河」になったとする見方もあります。

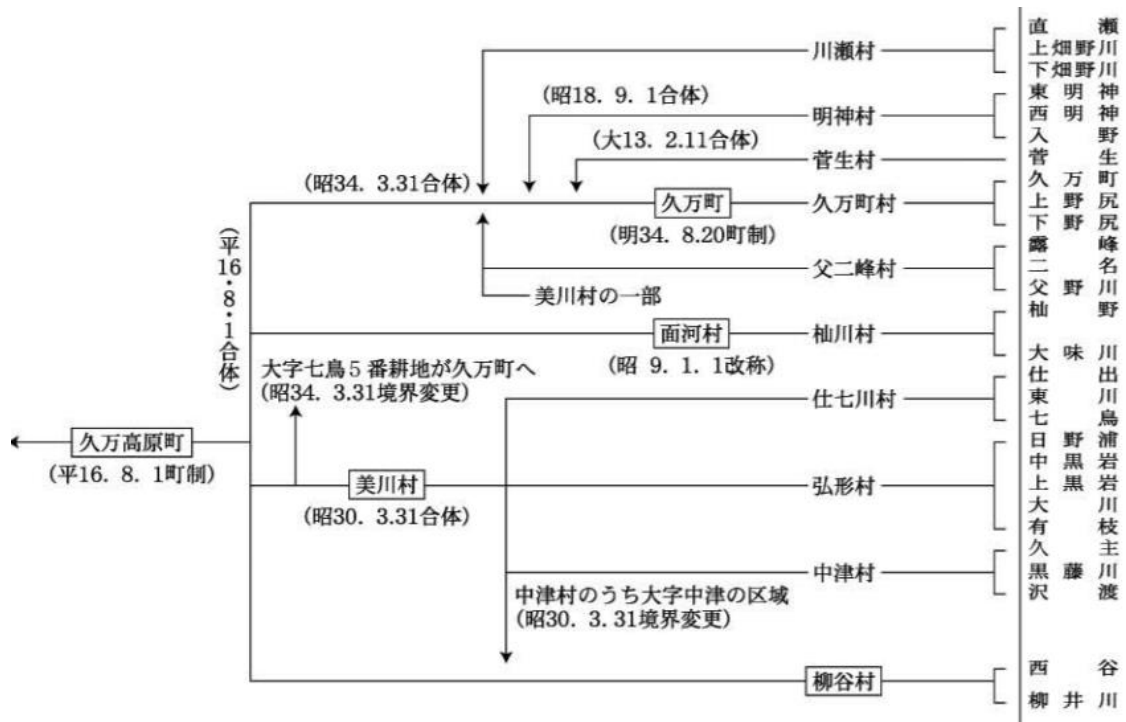
面河村の歴史

西暦(年号)	出来事
1890年(明治23年)	町村制施行、杣野村と大味川村とが合併し、杣川村となる
昭和初期	木炭やミツマタの生産が主たる産業に
1934年(昭和9年)	杣川村を面河村と改称
1935年(昭和10年)	省営バス(後の国鉄バス)の松山～久万間開通
1937年(昭和12年)	電気が通じる(一般家庭)
1945年(昭和20年)	枕崎台風による集中豪雨、大災害発生、村内で山崩れ多数発生、民家・田畑・道路・橋脚の流出多数
1947年(昭和22年)	菅県会議員(伊予市区選出)、県議会で松山平野への導水の提案(後に面河ダムとして実現)
1954年(昭和29年)	面河小学校、城山小学校統合
1954年(昭和29年)	道前道後水利事業が始まる
1955年(昭和30年)	石鎚国定公園指定
1958年(昭和33年)	面河ダム建設決定
1960年(昭和35年)秋頃	ダム水没家庭84世帯が順次住み慣れた地を離れ、松山平野等に転居。急激な過疎化始まる
1960年(昭和35年)	面河ダム起工
1963年(昭和38年)	面河ダム完成
1965年(昭和40年)	石鎚スカイライン着工
1966年(昭和41年)	国民宿舎「面河」開設
1968年(昭和43年)	笠方小学校閉鎖、渋草小学校に統合
1970年(昭和45年)	石鎚スカイライン開通
1970年(昭和45年)	若山小学校、面河第一小学校に統合
1974年(昭和49年)8月	自然保護の村宣言
1975年(昭和50年)9月	「石鎚の聖流郷面河」をスローガンとして決定
1975年(昭和50年)	村庁舎・住民センター建築の際も庁舎の位置をめぐる、大味川は通仙橋付近、杣野は渋草と、それぞれの主張があった。
1980年(昭和55年)	石墨小閉校
1989年(平成元年)	村制100周年
2004年(平成16年)8月1日	廃村

面河溪再整備計画

2-1-3 合併の推移

1934(昭和9)年に面河村と改称した後、昭和30年頃の合併では、地形や道路事情の悪さ等から「合併困難村」として、合併は経験しませんでした。その後、平成の大合併で、久万町、美川村、柳谷村と合併し、久万高原町となりました。



2-1-4 人口の推移

国勢調査人口の推移は下表のとおりです。平成初期には1,000人を超えていましたが、現在では500人余り(推計)となっています。

人口推移(国勢調査)

(単位 人)

	平成2年	平成7年	平成12年	平成17年	平成22年	平成27年
久万高原町	13,313	12,781	11,887	10,946	9,644	8,447
旧久万町	7,685	7,571	7,275	6,876	6,277	5,653
旧面河村	1,135	1,052	878	779	644	539
旧美川村	2,821	2,649	2,386	2,164	1,821	1,512
旧柳谷村	1,672	1,509	1,348	1,127	902	742
計	13,313	12,781	11,887	10,946	9,644	8,447

注)平成27年の旧4町村の人口は推定値

面河溪再整備計画

2-1-5 観光

面河村の観光は、面河溪谷と石鎚山に代表されます。

昭和40年代に、高度成長とともにレジャーの時代が訪れ、人々が観光地に繰り出すことを狙って、また、愛媛県内では数少ない山岳観光地として、村ではさまざまな観光開発が行われました。

村としては、愛媛県が運営していた国民宿舎を譲り受け、村営とすることにし、国民宿舎を抱え込むと村の財政を危うくする恐れがあると反対もありましたが、「天与の観光地を持つ当村は将来観光産業が中心になるだろう」との当時の村長の信念で断行されました。また、愛媛県も、石鎚スカイラインの建設をはじめとして、面河村の取り組みを支援しました。

石鎚スカイラインの開通直後は、それまで年間20万人程度とされた観光入込客数が一挙に60万人以上へと激増しました。しかしながら、その状況は長く続かず、現在は観光入れ込み客数は低迷しています。その原因としては、新緑や紅葉など、山や溪谷の自然の魅力はあるものの、山地ゆえ、都市部から移動時間を要し、都市部の近場の観光地との競合に見舞われたこと、また、「行き止まり」で折り返しとなることもあって、行き返りの時間のロスが多いことなどによります。さらに、モータリゼーションの進展により、マイカー観光、ドライブ観光が増えましたが、道幅が狭隘な区間もあり、また、目的地での十分な駐車場の確保が難しく、ドライバーに敬遠されたことなどが響きました。

なお、石鎚スカイラインは険しい山肌を縫うように作られたため、自然破壊ではないかとの批判も浴び、愛媛県知事を相手取った訴訟も提起されました。

主要観光地

面河溪、石鎚山、石鎚スカイライン、面河ダム公園、面河山岳博物館、おもごふるさとの駅



石鎚山



面河ダム

面河溪再整備計画

2-2 面河溪の位置、自然(地質・植生等)

2-2-1 位置

面河溪は、西日本最高峰の石鎚山の南斜面に源を発する面河川の9.6kmにわたる溪谷です(面河川は、仁淀川の上流域のうち、愛媛県側を呼びます)。

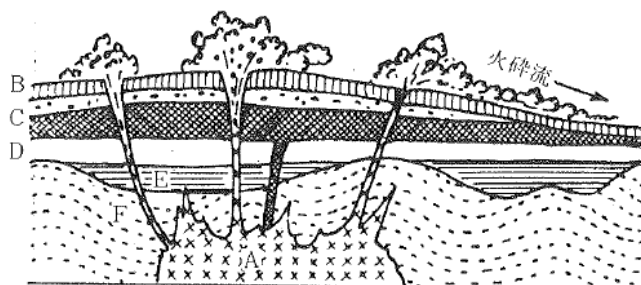
周囲を四国山地の高峻な山々に囲まれ、入口付近では標高650mに達します。V字谷となっており、早瀬、深淵、瀑布が連続しています。国の名勝(1933年指定)で、石鎚国立公園、面河・四国カルスト自然休養林にも指定されています。名所には関門、相思溪、五色河原、亀腹、蓬莱峡、紅葉河原、御来光の滝などがあり、紅葉の名所でもあります。かつては、石鎚スカイラインの建設に伴う落石により、溪谷が埋まるという自然破壊が問題化しました。

石鎚山への裏参道登山口があり、面河山(標高1525m)、愛大石鎚小屋を経て石鎚山頂に至ります。しかし、石鎚スカイラインの開通により、近年この登山道を利用する人は少なくなっています。

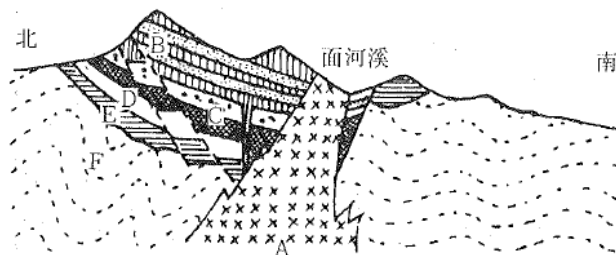
面河溪に通じる愛媛県道12号西条久万線は、通称「もみじライン」と呼ばれています。

2-2-2 地質

面河溪の地質は、石鎚山が火山性の山であることに起因し、多種類の火山岩類と、もともとあった岩石類、熱変性された岩石類等の様々な岩石から構成されています。また、そうした岩石は、色、割れ方、侵食度の違いから、流れる水流や樹木と相まって溪谷独特の美を形成しています。



石鎚山(天狗獄)



石鎚火山の活動とカルデラ陥没後の現在の石鎚山
(「石鎚の自然観察、1977」から。原図は永井浩三による。)

上図：軽石や火山灰が水蒸気とまじり合って激しい勢いで噴き出し、火砕流をつくる。

下図：火砕流が固まり溶結凝灰岩となって全体が円型に陥没、花崗岩質マグマはそのあとも上昇してくる。その後侵食を受ける。

A：花崗岩、B：天狗岳火砕流、C：黒森安山岩(両脚石安山岩)、D：夜明峠安山岩(斜方輝石安山岩)、E：久万層群、F：結晶片岩。

(出典)

「地形図でめぐる 愛媛の地理探訪」(昭和60年)

愛媛県高等学校教育研究会
社会部会地理部門 編集・発行

面河溪再整備計画

2-2-3 植生

面河地域から石鎚山にいたる植生は、シイ・カシ林(暖温帯林)、モミ・ツガ林(中間温帯林)、ブナ林(冷温帯林)、シラベ林(亜寒帯林)と変わり、面河溪はモミ・ツガ林(中間温帯林)に位置します。

面河溪の植生

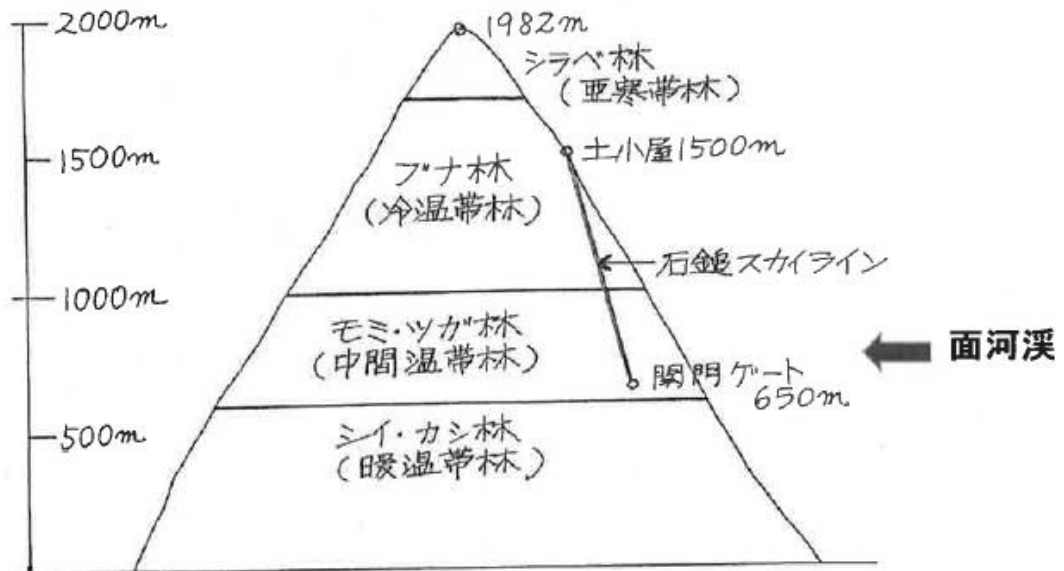


図1 石鎚山・面河溪の植生の垂直分布

(出典) 面河山岳博物館 学芸員矢野氏作成資料



面河溪再整備計画

2-3 面河溪の歴史

面河溪の歴史年表

西暦	年号	面河溪・石鎚の出来事
1783	天明3	松山藩山林奉行の加藤勘介による面河山林踏査 山中詠吟を残す。面河溪に関する文献で最古
1909	明治42	面河に小学校教師石丸富太郎の尽力により、松山からの探勝団9名が面河溪を訪れ、その内容を海南新聞に10数回に渡って連載。これにより初めて世間一般に面河溪の素晴らしさが知れ渡り始める
1914	大正3	高知県池川町出身の押岡丑弥が面河溪亀腹前に亀腹旅館を建築
1919	大正8	中予自動車設立。久万-松山間に定期便(乗合自動車)が走り始める
1927	昭和2	大面河宣伝会が組織される。大面河宣伝会は日本八景への登録に向けた宣伝組織
1930	昭和5	重見丈太郎が面河溪亀腹に溪泉亭を新築する
1933	昭和8	面河溪が名勝に指定(文部省)される
1934	昭和9	杣川村を面河村と改称
		伊予鉄バス、御三戸-渋草間が運行開始
		国鉄予土線(バス線)の松山-久万間が運行開始
1935	昭和10	吉田初三郎画「天下ノ絶景面河溪」が面河保勝会より発行
1938	昭和13	御三戸から若山までの自動車道が開通
1949	昭和24	面河ヒュッテ「山の家」が関門前カリヤロに完成(中川愛美による)
1950	昭和25	中川紅緑館(関門ホテルの前身)が若山から関門へ移る
1952	昭和27	関門から五色河原までの林道開発工事が始まる(3年後に完成)
1955	昭和30	石鎚国定公園の指定がなされる。蓬菜溪上に公立学校共済組合荘が、紅葉河原に県健康保険組合山の家が完成
1958	昭和33	7月20日、石鎚山系総合学術調査始まる
1961	昭和36	溪泉亭を伊予鉄道が買収、翌年には伊予鉄面河観光株式会社が発足
1963	昭和38	面河ダム完成、11月6日から放水路を閉め切って貯水開始。翌1月から送水開始
1965	昭和40	4月26日、石鎚スカイライン起工式。伊予鉄バス松山-久万線が開通
1966	昭和41	村営国民宿舎「面河」完成、6月1日より営業始まる
1969	昭和44	通天橋から国民宿舎手前まで(754m)、道路の幅員を2倍程度に拡張
1970	昭和45	9月1日、石鎚スカイライン開通式。2日から一般供用開始
1973	昭和48	面河村が県営国民宿舎「石鎚」と「岩黒山荘」を買収移管
1975	昭和50	8月中旬の台風5.6号による集中豪雨のため、石鎚スカイラインが82ヶ所で崩落。面河溪に土砂が流入
1977	昭和52	面河溪の通天橋から国民宿舎までの道路舗装完成
1982	昭和57	西暦と石鎚山の標高が符合する石鎚標高年。登山者が平年より10万人増 朝日新聞・(財)森林文化協会主催「未来に残したい日本の自然100選」に選出
1991	平成3	4月、面河山岳博物館開館
1994	平成6	面河特産品開発センターがオープン
1995	平成7	林野庁「後世に残すべき水源の森」に選出
2002	平成14	石鎚神社頂上社、避難小屋(頂上山荘)竣工。伊予鉄道が溪泉亭を面河村に寄付
2007	平成18	面河溪から石鎚へ登る面河ルート of 愛大小屋再建
2010	平成22	面河・石鎚コミュニティレータ養成事業スタート
2011	平成23	面河溪を愛する会が結成
		4月～7月、企画展「天下ノ絶景面河溪～探勝から観光へ、100年の軌跡～」を面河山岳博物館で開催。
		11月、苔の栈道復活。エコツアーが開催される
2015	平成27	グッドリバー(株)がキャニオニングをスタート
2018	平成30	住民組織「面河地区地域運営協議会」設立

面河溪再整備計画



昭和初期の絵葉書、亀腹橋(鶴ヶ背)

第3章 面河溪観光について

3-1 面河溪観光の歴史

面河溪観光の歴史は、「面河山岳博物館」矢野学芸員によると、大きく「幕開け」「名勝面河溪の誕生」「面河・石鎚観光ブーム」「保護と観光開発のはざま」「再創出」の5つの期間に分かれ、1900年台の幕開けから1950年台のブームを経て、現在は自然や環境教育、文化の再発見などの新たな価値の再創出期にあります。

面河溪観光の歴史

区分	時期	主な出来事
幕開け	1909～1930年頃 (明治42年～昭和初期頃)	<ul style="list-style-type: none"> ● 9名の探勝団が面河溪を訪れる ● 面河溪探勝の案内書刊行 ● 文人、墨客の招致によるブランド化 ● バス交通網が整備 ● 観光地へと一般化が始まる
名勝面河溪の誕生	1933～1955年頃 (昭和8年～昭和30年頃)	<ul style="list-style-type: none"> ● 1933(昭和8)年 面河溪が名勝に指定される ● 愛媛県や地元による活発な広報宣伝活動(天下ノ絶景面河溪の発行) ● 松山から久万、面河へのバス便拡充・道路整備が進む
面河・石鎚観光ブーム	1955～1965年頃 (昭和30年～昭和40年頃)	<ul style="list-style-type: none"> ● 1955(昭和30)年 石鎚国立公園が誕生 ● マイクロバスやマイカーによる一般観光客の増加 ● 関門から面河溪にかけて林道や駐車場、宿泊施設の整備が進む(昭和41年国民宿舎「面河」開設)
保護と観光開発のはざま	1970～1985年頃 (昭和45年～昭和60年頃)	<ul style="list-style-type: none"> ● 1970(昭和45)年 石鎚スカイラインが開通。石鎚登山が一般化する ● 面河溪と土小屋に宿泊・観光施設の整備が進む(昭和46年面河観光センター、63年面河ふるさと市場) ● 観光客の増大と自然環境への保全意識の芽生え
再創出	1990年頃～ (平成以降、現在)	<ul style="list-style-type: none"> ● 面河山岳博物館が誕生 面河溪と石鎚の自然を使った環境教育が始まる ● 面河溪の自然と文化の再発見 (愛大小屋再建、有志による「面河溪を愛する会」の結成など)

(出典)面河山岳博物館 学芸員矢野氏の資料を基に作成

面河溪再整備計画

面河山岳博物館

面河溪の入口・関門にあり、1991年に開館した博物館。石鎚山や面河溪の自然、歴史、山岳信仰などについて、石鎚山のパノラマ模型や動植物の標本など約3,000点の資料を使って紹介しています。年3回の企画展や季節に合わせた自然観察会や昆虫教室などの教育普及活動も行っており、学芸員による団体向けの面河溪ガイドも実施しています(要予約)。



写真 愛媛県

溪泉亭 面河茶屋

五色河原の上流にある溪泉亭は、地元の名士・重見丈太郎が1930(昭和5)年頃に建てられたとされています。和洋折衷の特徴的な意匠で、2001年まで宿泊施設として使われていましたが、施設の損傷が激しく、現在は一部の利用に留まっています。建て増しされた食堂部分は面河茶屋として営業しており、地元の魚・野菜を使った面河ならではの郷土料理を味わえます。



写真 (株)いよぎん地域経済研究センター

おもごふるさとの駅

面河山岳博物館から南約5kmに位置し、都市と農村の交流の拠点としてオープンした休憩スポットで、面河特産品開発センター、面河ふるさと市場があります。川魚の塩焼や手づくりまんじゅう、おもち、とれたての新鮮野菜のほか、独自に開発した商品まで数多く取りそろえており、特に紅葉シーズンには、多くの観光客で賑わいます。



写真 石鎚山系連携事業協議会

キャニオニング体験

6月上旬から10月上旬にかけて、面河川、鉄砲石川をフィールドに、滑ったり、飛び込んだり、潜ったりしながら、面河の大自然を満喫することができます。一定の条件を満たせば、大人だけでなく子どもも参加でき、1回あたりの所要時間3時間のうち、2時間弱は川の中で楽しむことができます。



写真 久万高原町観光協会

面河溪再整備計画

3-2-3 地域住民が主体となった観光振興等の取り組み

(1) 面河地区地域運営協議会

厳しい財政状況、人口の減少、少子高齢化の進展等により、特に人口の少ない過疎地域を中心に、将来的な行政サービスの低下が懸念されています。その対応策の一つとして、地域の住民が自主性をもって地域の活動等を企画・運営していく取り組みが全国で行われています。

面河地域では、本町としては初めて、2018年4月に「面河地区地域運営協議会」が設立されました。同協議会では、福祉部会、交通部会、観光部会の3つの部会が設置され、観光部会では、2018年度の活動として、面河溪の振興にテーマを絞り、看板や橋の補修、ボランティアガイドの育成、自動車の乗り入れ禁止日の設定などが行われました。

今後は、2018年度の実績成果などを踏まえつつ、面河溪を主たる対象に、観光振興に向けた継続的な活動が行われる予定です。



(2) 面河溪を愛する会

「面河溪を愛する会」とは、愛媛大学山岳部OBや町内の山歩きサークル「久万高原遊山会」のメンバーなどを中心に構成される任意団体で、面河溪の自然や景観保護を目的として、面河溪をフィールドに様々な活動を行っています。

面河溪から石鎚山頂に向かう登山道「面河本谷ルート」の復元をはじめ、虎ヶ滝から御来光の滝へと続く登山道の修復、2017年の冬からは、面河溪の魅力伝え、渓谷へのさらなる誘客促進を目的としたフォトコンテストの開催など、その活動分野は多岐にわたっています。



面河溪フォトコンテスト応募作品の2018年応募作品を「秋季」「春季」「夏季」の3期に分けて開催します。みなさまお買い合わせの上、ぜひご来場ください。

2018年秋季全応募作品展 2月24日(日)～3月 7日(水)
※3月 8日(金)は観覧休日とさせていただきます。

2018年春季全応募作品展 3月 9日(土)～3月28日(木)
※3月29日(金)は観覧休日となります。

2018年夏季全応募作品展 3月30日(土)～4月21日(日)

道の駅天空の郷さんさん インフォメーション2階

【主催】面河溪を愛する会 【後援】久万高原町・道の駅「天空の郷さんさん」

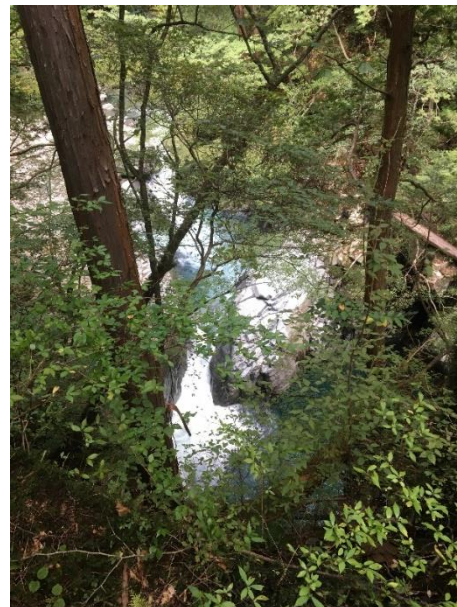
面河溪再整備計画

3-2-4 課題

(1) 観光開発に伴う負の名残、手入れ不足に伴う自然景観の悪化

面河溪は、その美しさから名勝の指定を受け、本町を代表する観光地の一つとなっていますが、昭和30年代以降の面河・石鎚観光ブームの到来以降、石鎚スカイラインの整備、溪谷周辺での宿泊地・観光施設の開発などに伴い、美しい自然の一部が汚された歴史があります。

また、国定公園の指定を受けているため、基本的に区域内の樹木の伐採等は認められず、散策道沿い等の樹木は生い茂り、ビューポイントとされている箇所でも、景色が見えにくかったり、その場に近寄ることが難しかったりする状況にあります。さらに、案内看板の老朽化、掲載されている情報と現状のミスマッチの発生などの課題も生じています。



(2) 観光施設の老朽化

対象区域には観光施設として国民宿舎 面河、溪泉亭が整備されていますが、溪泉亭の一部を利用して営業している面河茶屋を除き、いずれも利用者数の減少や施設の老朽化のため、閉鎖されたままの状態となっています。※国民宿舎面河は2018年度に解体予定

面河溪内唯一の飲食施設である面河茶屋は、地元の食材を活用した料理を提供したり、フォトコンテストの写真を展示したりするなど、面河溪観光の拠点施設としての役割を果たしていますが、増築元の建物である溪泉亭については、施設全体が傾いていたたり、一部の床や壁が朽ち落ちたりするなど損傷や老朽化が著しく、撤去する等の早急な対応が必要な状態にあります。

面河溪再整備計画



漏水により傷みが激しい溪泉亭内部



漏水により傷みが激しい溪泉亭内部

(3) アクティビティや消費シーンの不足

最近では、溪谷をフィールドとしたキャニオニングが行われており、若年層を始め、県外からも多くの方が訪れていますが、実施できる時期が夏季に限定されてしまいます。また、面河山岳博物館の学芸員や地域住民によるガイド付きのハイキングなども行われていますが、イベント開催時などに限られています。これらを除けば、観光客が体験できる特徴的なアクティビティはなく、充実している状況とは言えず、また、飲食や物販ができる場所も、溪泉亭 面河茶屋しかないのが現状です。



面河溪再整備計画

3-3 面河溪への観光客からの意見

3-3-1 面河溪来訪者に対するアンケート調査

面河溪を訪れる観光客の属性、面河溪に対する満足度や課題などを明らかにすることを目的に、愛媛大学山岳部OBの方々が中心となった「面河溪を愛する会」の皆さまにより、以下のアンケート調査が実施されました。

(1) 調査概要

① 対象者

調査期間中に面河溪を訪れた観光客

② 実施方法

据置式アンケート(溪泉亭・面河茶屋にアンケート調査票を設置し、記入・回答してもらう)

③ 調査期間

2018(平成30)年

④ 調査項目

属性

- 性別、年齢層、居住地

旅行内容

- 同行者

- 面河溪を訪れた目的

- 面河溪を知ったきっかけ

面河溪の観光に対する満足度など

- 面河溪に対する満足度

- 面河溪の今後の改善点

- 宿泊場所の必要性和希望する宿泊場所の形態

- 四国内で行ったことのある溪谷

⑤ 回答者

805人

面河溪再整備計画

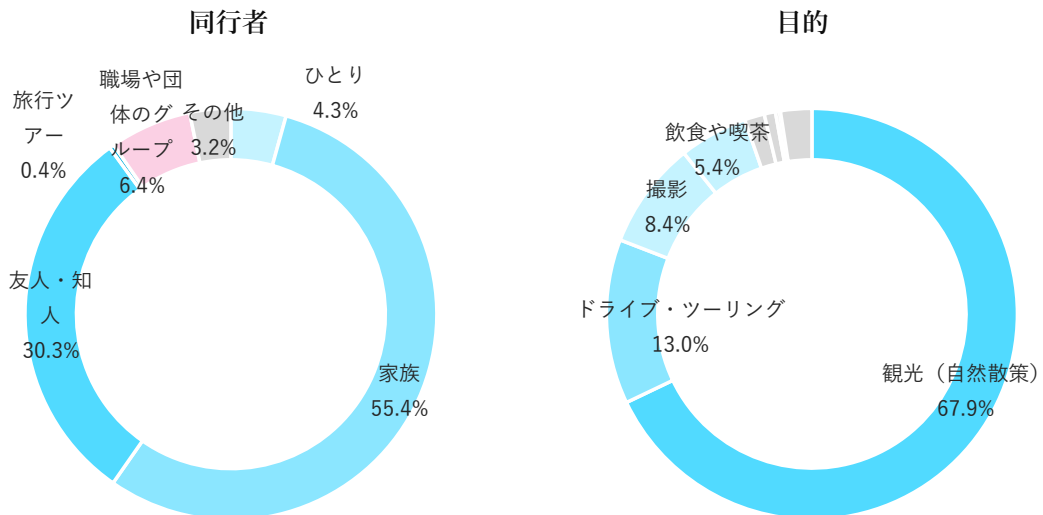
(2) 調査結果

① 属性

性別	男性 350(44.5%)、女性 436(55.5%) ※不明 29
年齢	10歳代 13(1.6%)、20～30歳代 91(11.4%)、40～64歳 305(38.3%)、65歳以上 387(48.6%)
居住地	県内 519(64.5%)、県外 279(34.7%)、海外 7(0.9%)

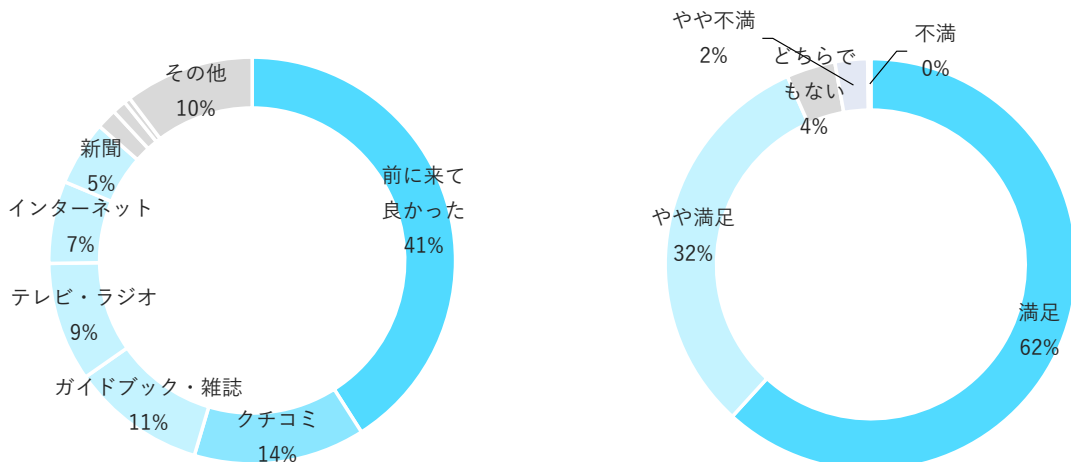
② 旅行内容

同行者は「家族」が55.4%と最も多く、「友人・知人」(30.3%)と合わせると90%近くを占めている。来訪目的は「観光(自然散策)」が67.9%と最も多く、「ドライブ・ツーリング」(13.0%)、「撮影」(8.4%)と続いている。



③ 面河溪を知ったきっかけ

知ったきっかけとしては「前に来て良かった」が41%と最も多く、満足度も「満足」「やや満足」を合わせると95%近くを占めており、リピート率の高さをうかがえる。



面河溪再整備計画

④ 面河溪に満足な点・不満な点 ※自由回答からの一部抜粋(ほぼ原文)

面河溪の満足な点としては、自然の良さに関するものが多く、その他にアクセス性の向上や溪泉亭面河茶屋での料理、スタッフに対しても評価が高い。

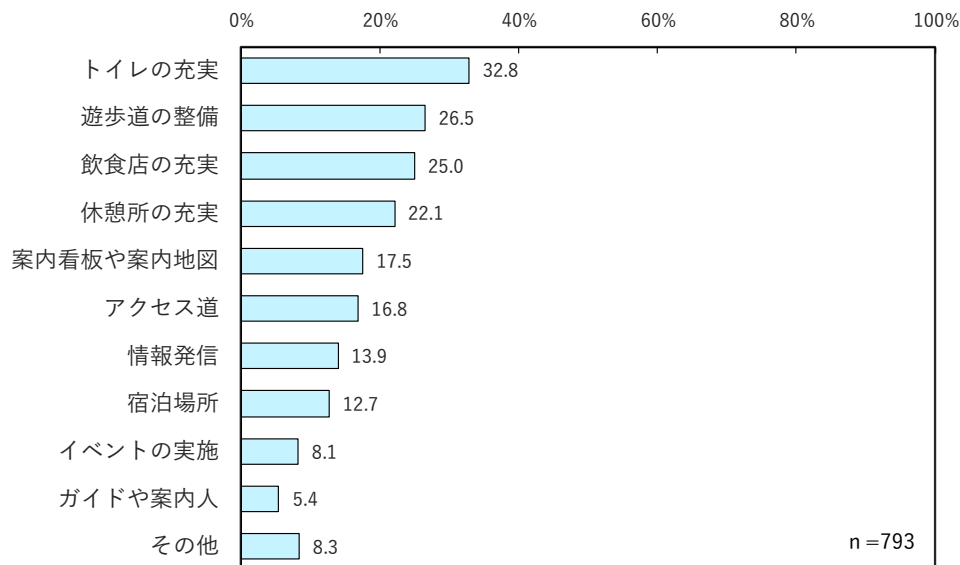
一方、不満な点としては、全体的な印象が年々下がりつつあるという声や、食事や宿泊、売店、駐車場の不足、トイレの改善を望む声、タイムリーな情報発信の不足などが挙げられている。

満足な点	不満な点
<p>■自然の良さに関するもの</p> <ul style="list-style-type: none"> ・とても自然が残っており、癒されます。何より美しい。 ・川のせせらぎ、木々の美しい葉、紅葉、目の保養になるのが一番です。 ・溪谷が素晴らしい。水がきれいで、とても気持ちがいい。 ・大自然を肌で感じることができました。 ・自然が雄大で水がきれいである。 ・雨でしたが、水もきれいで感動しました。仁淀ブルーを見て、また観光に来ました。仁淀のようにもっとアピールされたらよいと思います。 ・静かでゆっくりストレス解消になります。 ・溪谷のダイナミックさと川の水の美しさのコントラスト。 ・この自然をいつまでも守っていただきたいです。 ・自然豊かで、川もきれいで環境もよい。定食屋からの景色もよい。 ・自然がそのまま、手を加えていないところがよかったです。 <p>■アクセス等に関するもの</p> <ul style="list-style-type: none"> ・道がよくなっているので、松山からのアクセスも負担がない。 ・自然が満喫できて、市内から車で近く、途中で道の駅などもあり、トイレ休憩なども楽にできる。 <p>■食事、サービス等に関するもの</p> <ul style="list-style-type: none"> ・溪泉亭のなべ焼きうどんがとてもおいしかったです。 ・食堂のあまご魚がおいしかったです。 ・お天気もよかったのもありますが、紅葉と水流が美しく感動しました。お店のスタッフの方も感じがよいです。 	<p>■全般に関するもの</p> <ul style="list-style-type: none"> ・来るたびに寂れた感がある。 ・すべての面で昔の面影がない。 <p>■施設の不足等に関するもの</p> <ul style="list-style-type: none"> ・食事や宿泊するところがほしい。 ・お店や売店があるともっとよいし、整備不足。そうじもしてほしい。 ・駐車場がやや少ない。 ・駐車場から遠い。片道でも送ってくれたらと思う。 ・たどり着くまでの道しるべがもう少し詳しくほしかった。 ・看板の案内内容が不十分(展望台にたどり着けず)。 ・もう少し遊歩道が整備されていると、なおよかったと思います。 ・景観はよいですが、トイレが最悪です。今後のために少し補修してください。 ・流木処理が不満。速やかに撤去されたし。 ・キャンプ場の整備不足、宿泊施設がない。 <p>■情報発信の不足に関するもの</p> <ul style="list-style-type: none"> ・紅葉が過ぎていて残念でした。 ・ネットで紅葉見ごろの記事を見たが、少し早かった。 <p>■景観に関するもの</p> <ul style="list-style-type: none"> ・電線が見えなければ、景観はさらによくなると思います。

面河溪再整備計画

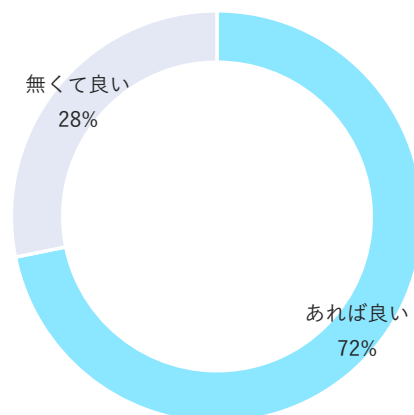
⑤ 面河溪の改善点

改善してほしい点としては、「トイレの充実」が32.8%と最も高く、「遊歩道の整備」(26.5%)、「飲食店の充実」(25.0%)、「休憩所の充実」(22.1%)と続く。「イベントの実施」や「ガイドや案内人」といったアクティビティの充実、ツアーの質の向上よりも、トイレ、遊歩道、休憩所の充実等の足元の改善が求められていることがうかがえる。

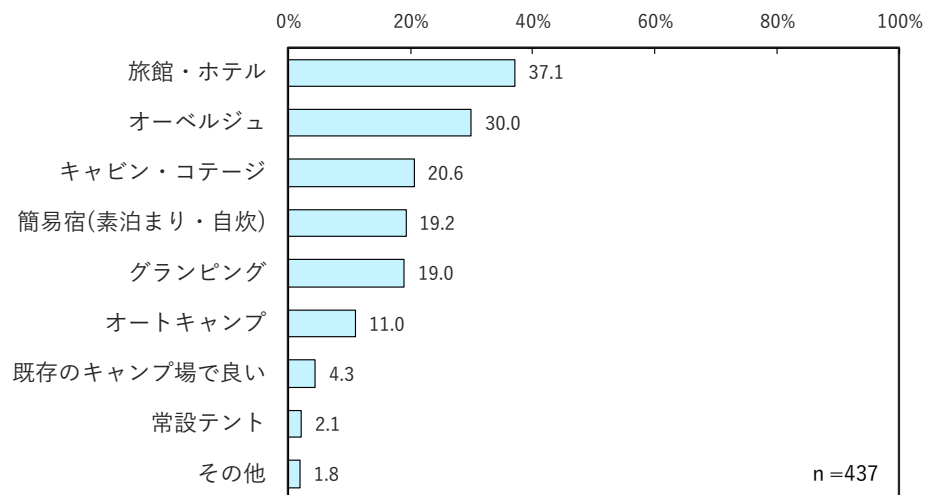


⑥ 面河溪での宿泊施設の必要性と施設形態

面河溪での宿泊施設の必要性については、「あれば良い」の割合(72%)の方が「無くて良い」(28%)よりも高く、その施設形態としては、「旅館・ホテル」が37.1%と最も高く、次いで「オーベルジュ」(30.0%)、「キャビン・コテージ」(20.6%)となっている。



面河溪再整備計画



第4章 面河溪再整備に向けて

4-1 面河溪観光の目指すべき姿

本計画の上位計画に位置付けられる「久万高原町観光振興計画(2019.3)」では、面河エリアの資源・強みとエリアが抱える課題等を踏まえ、面河エリアが目指すコンセプト等を以下のように定めています。具体的には、四国屈指の景勝地である国指定名勝 面河溪に残る貴重な自然を次代に継承するため、本町内の他のエリアで目指す観光客/観光消費の増加を一義的な目標とはせず、自然の保護を優先し、「自然」を通じたツーリズムの推進や、人と人との交流創出を図っていきます。

なお、同計画で定めた面河エリアは主に本計画の対象区域である面河溪を中心としたものであることから、本計画のコンセプト等もこれに準拠するものとします。

地域の資源・強み	地域の課題
<ul style="list-style-type: none"> ・手つかずの自然や希少な高山植物などが残る 国指定名勝 面河溪 ・地域が主体となった観光振興に向けた取り組み 	<ul style="list-style-type: none"> ・観光開発に伴う負の名残、手入れ不足に伴う自然景観の悪化 ・観光施設の老朽化、アクティビティや消費シーンの不足

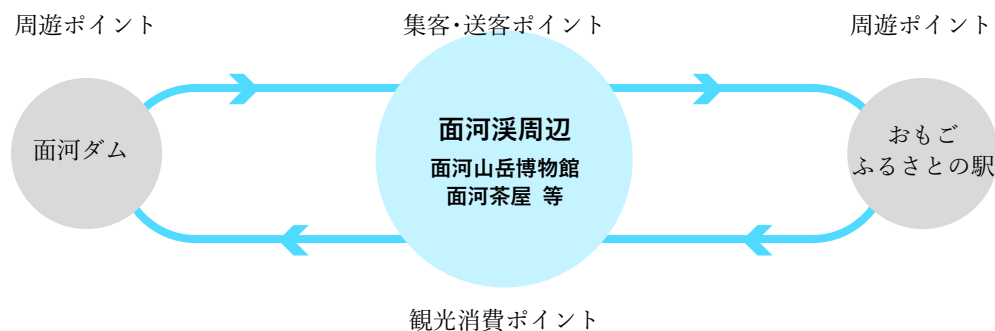
コンセプト

自然と共生するエコツーリズムの推進

- 手つかずの自然を次代に継承するための環境保護、「自然」をテーマとしたツーリズムの推進、それらを通じた人と人との交流の創出を図ります。
- ※面河エリアは観光客/観光消費の増加を一義的な目標とはせず、環境保護を優先します

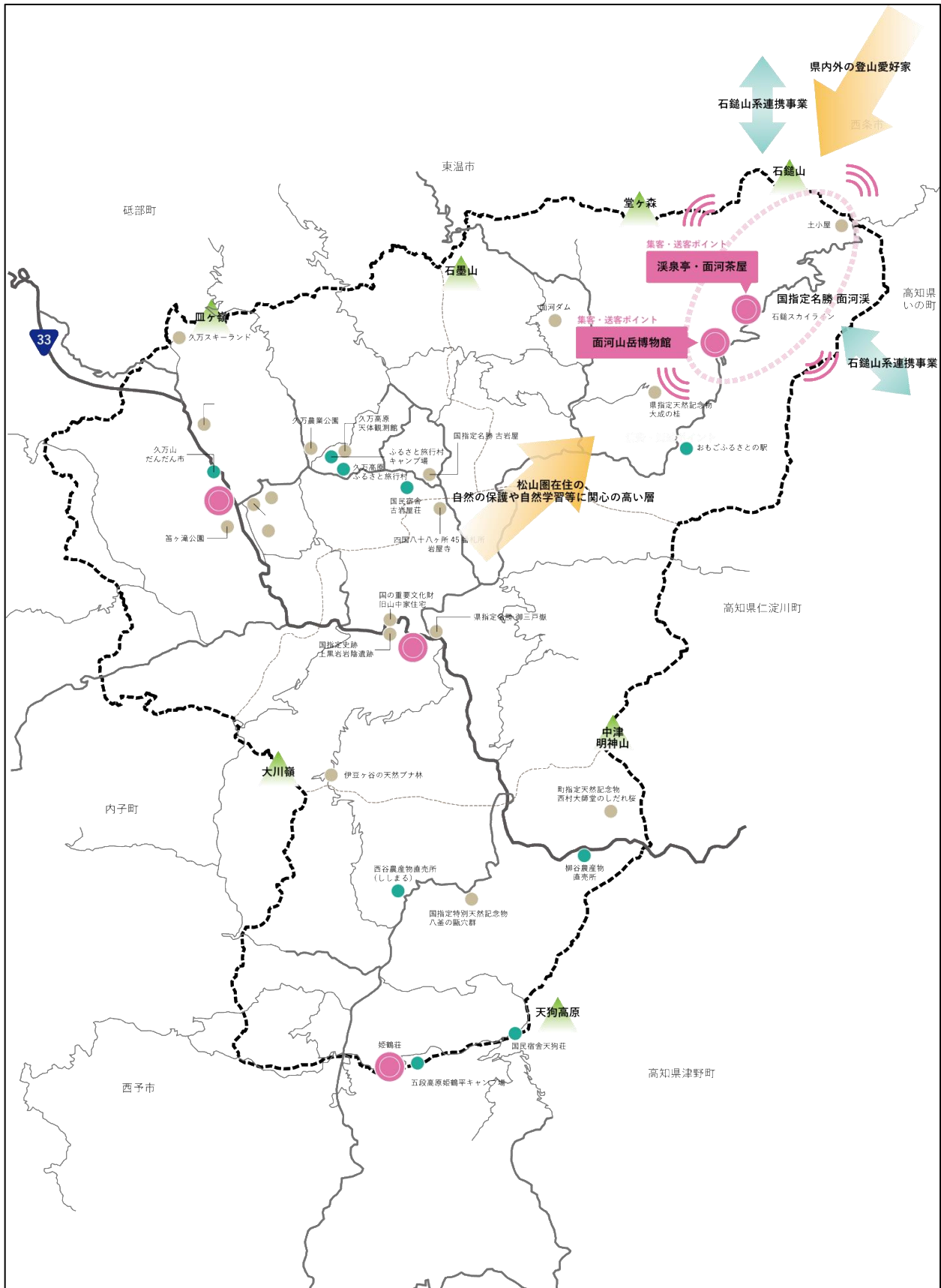
主たるターゲット

松山圏在住の自然の保護、自然学習等に関心の高い層／県内外の登山愛好家



面河溪再整備計画

面河溪のエリアコンセプトイメージ



面河溪再整備計画

4-2 面河溪再整備に向けたアクションプラン

「久万高原町観光振興計画(2019.3)」では、面河エリアのアクションプランとして、以下のプランが定められています。面河溪の再整備に向けて、これらのプランを実践していくとともに、本計画では各プランで短期的な計画として位置付けられた施策の具体的な内容を定めます。

「久万高原町観光振興計画(2019.3)」に定められたアクションプラン

プラン1		エコツーリズム・交流の拠点となる施設の整備・運営	行政	民間
短期 (1~3年)	<ul style="list-style-type: none"> ■面河溪におけるエコツーリズムを推進する施設設置の検討 <ul style="list-style-type: none"> ・「面河エリア」におけるエコツーリズム推進の拠点となる施設に必要となる機能等を検討し、実際の設置に向けた検討を進めます。面河溪の自然を中心的なキーワードにして「環境保全ボランティア」「自然学習・啓蒙活動」「各種エコツーリズムの推進」等の活動の拠点としての機能を入念に検討します。 ■エコツーリズムを推進する組織の検討 <ul style="list-style-type: none"> ・上記施設の管理運営、また当該施設におけるあらゆる活動の主体となる組織に求められる機能を検討し、その設立に向けた準備に取り組みます。 ■面河溪におけるエコツーリズム推進拠点の整備 <ul style="list-style-type: none"> ・上述の拠点整備のハード整備について検討します。 			
中長期 (4~10年)	<ul style="list-style-type: none"> ■面河溪におけるエコツーリズム推進拠点の整備の推進 <ul style="list-style-type: none"> ・上記拠点整備を進め当該地におけるエコツーリズムの拠点として活用します。 			
プラン2		エコツーリズムプランの造成、ネイチャーガイドの育成		民間中心
短期 (1~3年)	<ul style="list-style-type: none"> ■エコツーリズムプランの造成 <ul style="list-style-type: none"> ・「面河エリア」におけるエコツーリズムの推進に向けて、面河溪の自然を体感できるツーリズムプランを造成、販売していく必要があります。そこで、面河溪の自然が体験できるプランを複数造成していきます。またこうしたプランを対外的に積極的に発信していきます。 ■ネイチャーガイドの育成 <ul style="list-style-type: none"> ・上記プランにおいて、中核的な役割を担うガイドの育成についての取り組みを進めます。 ■地域との連携した環境教育の実施 <ul style="list-style-type: none"> ・当該地の自然を未来に伝えていくために、地域の子どもたちへの自然・環境教育を実施いたします。 			
中長期 (4~10年)	<ul style="list-style-type: none"> ■上記施策の継続的な実施 			

面河溪再整備計画

プラン3 面河エリアの産品を活用したお土産品の開発

民間中心

短期 (1~3年)	<ul style="list-style-type: none">■面河エリアの産品を使用したお土産品の開発・「面河エリア」における観光消費額の向上や、面河エリアの魅力発信のために「面河エリア」の産品を活用したお土産品の開発に取り組みます。■久万高原町の産品を使った飲食メニューの開発・同様に「面河エリア」の産品を使った飲食メニューの開発に取り組みます。
中長期 (4~10年)	<ul style="list-style-type: none">■上記施策の継続的な実施

プラン4 周辺環境の整備

行政

民間

短期 (1~3年)	<ul style="list-style-type: none">■エリア内各施設における受け入れ環境整備・エリア内各施設における受け入れ環境を整備します。特にトイレ環境など、来訪者の満足度を著しく損なう部分に関する整備は早急に進めていきます。■自然環境の景観回復に向けた取り組み・面河川周辺の景観整備を実施します。短期的には、容易に除去が可能な看板等の整理や、ゴミ拾い等の簡単な施策から取り組んでいきます。■自然環境の景観回復に向けた取り組みの拡大
中期 (4~6年)	<ul style="list-style-type: none">・面河溪全体の景観整備を実施します。特に空き家等の建物の修繕や利活用、遊歩道の簡易的な整備、キャンプ場全体の再整備等に取り組みます。・また動植物等の生態系の保全にも取り組んでいきます。
長期 (7~10年)	<ul style="list-style-type: none">■自然環境の景観回復に向けた取り組みの拡大(インフラ整備)・面河溪全体の景観整備を実施します。特に長期的には、道路等のインフラ整備や、容易に除去のできない構造物の整備等に取り組みます。

4-3 プラン1 ■ エコツーリズム・交流の拠点となる施設の整備・運営

4-3-1 拠点施設整備の必要性

(1) 地域の資源・評価されている点

これまでに整理したとおり、面河溪には長い歴史のもとで育まれた美しい自然と景観があり、石鎚山系への登山者のほか、春の新緑や秋の紅葉を楽しむ人々、面河溪の溪流を利用したのキャニオニングを楽しむ人々など、県内外から多くの観光客が訪れています。面河溪に対する満足度は高く、リピーターの割合も半数近くに及んでいます。

さらに、面河溪の自然を深く知り、より散策を楽しむことができるよう、地元では、ボランティアガイドやトコロジストの育成などに取り組まれています。

(2) 地域の課題・改善点

一方で、この貴重で恵まれた地域の資源を将来にわたって適切に保全し、次代に引き継いでいくことが本町としての責務とも言えます。ただ、保全にあたっては、団体観光客が押し寄せた時代に整備された観光施設や設備の老朽化が著しく、今後、継続的に活用し続けることが困難な状態にあり、解体・除却等の対応が必要です。

また、観光客からは、トイレや遊歩道、休憩所等の現状に対する不満、改善・充実を求める声もあり、観光客を受け入れる上で最低限の質の確保も課題となっています。

(3) 拠点地域の整備の必要性

面河溪の価値をさらに高め、県外・国外へ誇れる場所としていくためには、上記の課題のとおり、現状のままでは困難なことから、観光客を受け入れる場所、環境保全など地域の方々が活動する場所、観光客と地域の方々とが交流できる場所として、新たな拠点を整備する必要があります。

地域の資源・評価されている点	地域の課題・改善点
<ul style="list-style-type: none">・手つかずの自然や希少な高山植物など面河溪ならではの景色が残る・自然景観等に対する来訪者の満足度は高く、多くのリピーターが訪れている・地元でのボランティアガイド、トコロジスト(場所の専門家)の育成の動きがある	<ul style="list-style-type: none">・素晴らしい自然を次代に引き継ぐため、国定公園にふさわしい環境の保全が必要である・面河溪に立地する観光施設の老朽化が進み、既存の状態のままでの活用は困難な状況にある・トイレ、遊歩道、休憩所等、観光客を受け入れる上で最低限必要な環境の充実が必要である

面河溪の課題を克服し、地域の魅力をさらに高めるために

環境保全、自然学習、エコツーリズム等の活動場所として
エコツーリズム・交流拠点施設の整備

面河溪再整備計画

4-3-2 導入機能

拠点施設の導入機能としては、前述の施設の役割を踏まえ、ビジターセンターとしての機能を基本としながら、既存施設との連携・役割分担のあり方を踏まえ、以下の機能を導入するものとします。

(1) ビジターセンターに求められる機能

ビジターセンターとは、自然公園法施行令第1条第9号に掲げる博物展示施設に該当し、「主としてその公園の地形、地質、動物、植物、歴史等に関し、公園利用者が容易に理解できるよう、解説活動又は実物標本、模型、写真、図表等を用いた展示を行うために設けられる施設をいう。」とされています。「案内」「解説」「体験促進」「休憩・避難」「調査・研究」「管理運営」の6つの機能がありますが、センターとしての主な目的、立地場所等によって、その有無や濃淡は異なります。

(2) 既存施設が有する機能

面河溪の対象区域内には、類似の機能を有する施設等として、面河山岳博物館及び溪泉亭・面河茶屋があり、導入機能の検討にあたり、これら施設との連携や役割分担を考慮する必要があります。

面河山岳博物館では、自然体系等に関する調査・研究をはじめ、収集された資料の展示や学芸員によるツアーガイドによる案内・解説機能、企画展に合わせた各種教室等の開催による教育普及機能を有しています。溪泉亭・面河茶屋は、面河溪での唯一の休憩場所となっており、地元食材を生かした食事やお土産品の販売、写真コンテストの優秀作品の展示などが行われています。また、溪泉亭の一部は、夏季のキャニオニング体験のための事務室・更衣室として使用されています。

(3) 面河溪に関わる人々の活動・交流場所としての機能

面河地域では、面河地区地域運営協議会や面河溪を愛する会、山のボランティアネットワーク(通称 山ボラ)など、面河の環境を自分たちの手で守っていききたいとの思いから、自然の保全や観光振興等を目的として、住民等主体の活動が行われています。

多くの主体が様々な自主活動を行っていますが、それぞれの活動の拠点場所や主体同士が連携・交流を図るような場所はないのが現状です。

(4) 導入機能

上記を踏まえ、拠点施設に導入する機能としては、面河山岳博物館がすでに有している調査・研究機能は博物館本来の機能であることから、拠点施設には導入せず、案内機能、解説機能は連携・役割分担を図るものとします。

加えて、溪泉亭・面河茶屋が有する休憩機能、飲食機能、物販機能のほか、さまざまな主体の面河溪での活動拠点場所としての交流機能、「自然」をテーマとしたツーリズムを推進するための体験促進機能を導入します。

面河溪再整備計画

導入機能の考え方



面河溪再整備計画

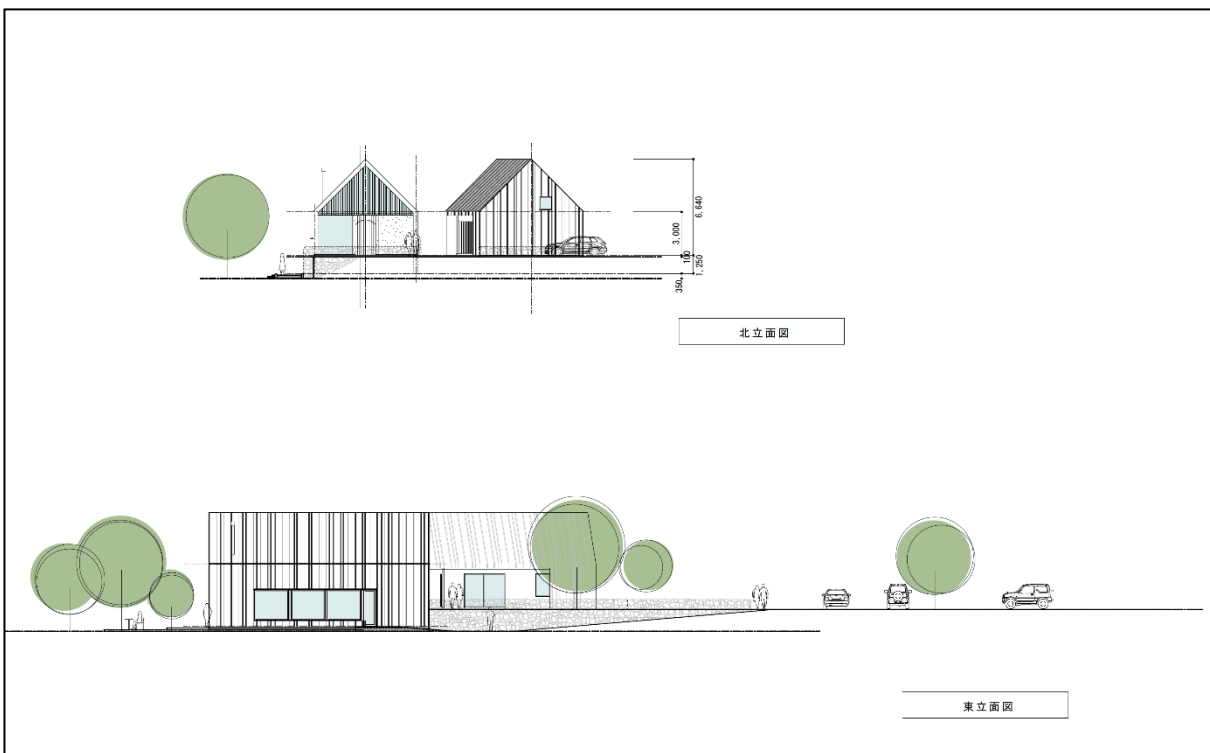
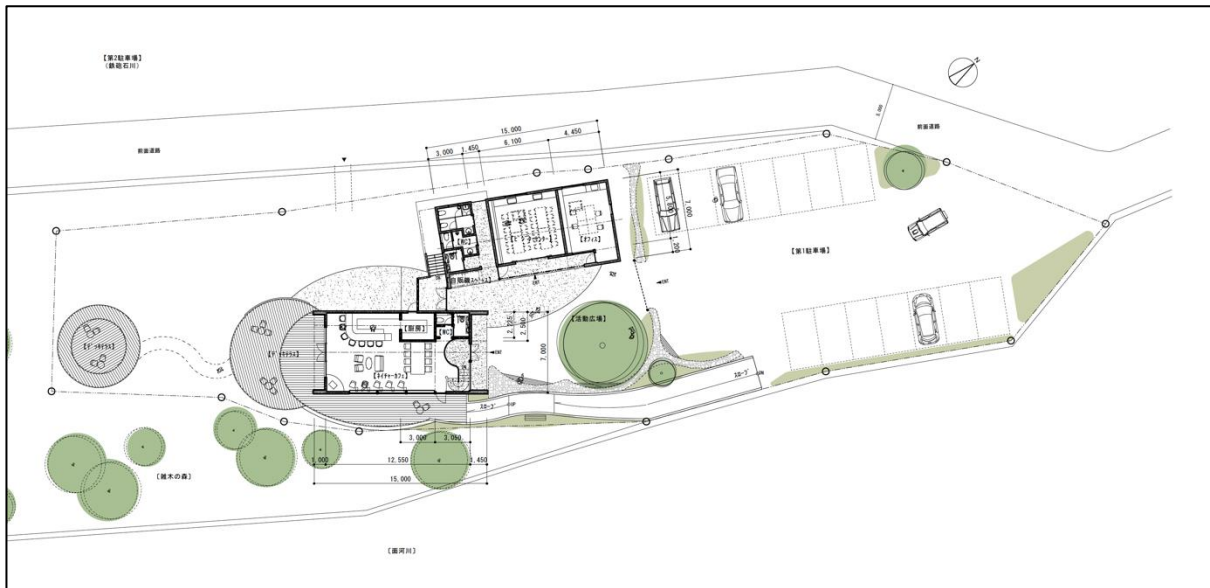
4-3-3 整備対象地

拠点施設は、国民宿舎面河の跡地を活用して整備するものとします。国民宿舎面河は2018年度に解体・撤去し、更地化する予定です。



面河溪再整備計画

4-3-4 拠点施設の整備イメージ ※現時点のイメージであり決定したものではありません



面河溪再整備計画

4-3-5 溪泉亭の活用

面河溪谷に立地する既存建物の「溪泉亭」について、今後、建築的に活用可能かどうかを判断するため、専門家を交え、既存資料の確認、現地での目視確認により調査を行いました。調査の結果は以下の通りです。

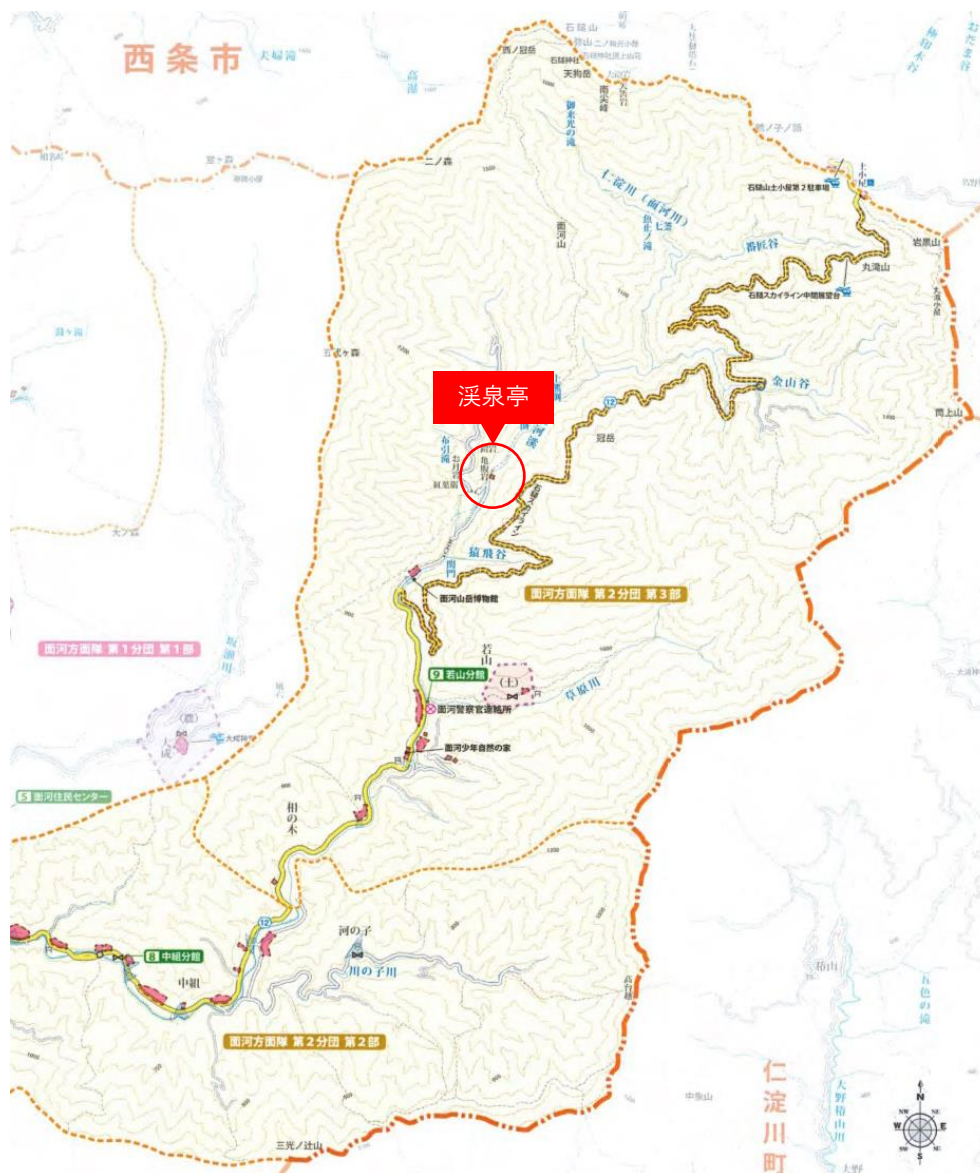
(1) 建物の位置について

「溪泉亭」が立地する地域は「急傾斜地崩壊危険箇所」に指定されています。【資料1】

2001(平成13)年に土砂災害警戒区域等における土砂災害防止対策の推進に関する法律(平成12年法律第57号)が施行され、土砂災害特別警戒区域内の建築制限として、住宅の外壁などの主要構造部を鉄筋コンクリート造とする必要があります。

また、崩れた土砂が建物を押し出すため、西側の山面に沿った方向(長手方向)に鉄筋コンクリート造の壁を設ける必要があります。

【資料1】 防災マップ



面河溪再整備計画

(2) 建築構造について

コンクリート基礎にひび割れが生じています。アンカーボルト、引き抜き金物が十分な性能を発揮できない場合があります、補強が必要です。【写真1・2】

玉石に柱が直接載っている箇所が建物内にあり、建物の一体性が弱く、基礎を踏み外して建物がバラバラになる恐れがあります。床を補強するか、足固めを設置するなど、建物が一体で動くようにする必要があります。【写真3】



屋根の雨水の排水方法が悪く、漏水している箇所があり、漏水の激しい箇所の中には、床が朽ちて下階に落ちそうな箇所があります。また、引き違い扉の上枠の中央部が非常に下がっている箇所があり、早急に漏水対策をする必要があります。【写真4・5】



面河溪再整備計画

柱寸法で10cm角の細い柱があり、補強する必要があります。建物全体では、ほとんどが12cm角の柱のため、それらについては問題ない寸法となっています。【写真6・7】

下げ振りの長さ約1.6mにおける柱の倒れを測定したところ、長手方向は1、2階とも3mm程度で特に問題ありませんが、短手方向の1階は6mm、2階は15mmで、川の方に倒れています。原因は不明ですが、山側以外の外部の柱、壁の腐れ等の箇所は確認できないため、川側の建物の基礎が下がっている可能性があります。仕上げ等を撤去し、原因を究明して措置する必要があります。

【写真6・7】



(3) 劣化状況について

(財)日本建築防災協会発行「木造住宅の耐震診断と補強方法 木造住宅の耐震精密診断と補強方法(改訂版)」内の「老朽度チェックシート」により目視調査した結果、樋等に起因する屋根の漏水、山側が常時非常に湿っているため外壁の腐朽及び柱の腐朽、コンクリート基礎の亀裂の劣化により、劣化低減係数が0.7未満となり、「非常に老朽化している建物」の判定となりました。【写真8・9】



(4) 総合評価

渓泉亭の立地場所、建築構造、劣化状況から判断すると、現状のまま建築物として活用することは非常に厳しいものと考えられます。しかしながら、かつて高級旅館として地域に賑わいをもたらしたこの建物に愛着を持つ人も少なくありません。

そのため、今後の活用方法については、地域住民の方々と協議を重ねながら、方向性を定めていくものとします。

面河溪再整備計画

4-4 プラン2 ■ エコツーリズムプランの造成、ネイチャーガイドの育成

4-4-1 エコツーリズムプラン造成等の必要性

(1) 地域の資源・評価されている点

面河溪入口付近(標高650m)から石鎚山頂(同1,982m)までは標高差1,300m以上あり、温帯林から亜寒帯林までの多様な植生と、そこに生息する様々な動物を観察することができます。また、花や紅葉、雪といった、季節ごとの楽しみがあります。

水辺では、溪流釣りのほか、近年ではキャニオニングも実施できるようになり、面河溪を楽しむ新たなアクティビティとして人気を博しています。また、溪谷内にはキャンプ場も整備されており、夜の静謐さや満天の星空を満喫することもできます。さらに、石鎚山ヒルクライムの開催を契機に、周辺では自転車での散策やトレーニングをする人も増えており、新たな観光客層の開拓やリピーターの獲得につながっています。

(2) 地域の課題・改善点

面河溪の豊かな自然はそれだけで十分美しく、散策等でそれを味わうことができますが、単に周遊するだけでは、その希少性や魅力を十分知ることができない場合もあります。面河溪を熟知したガイドからその歴史や成り立ち、見所を解説してもらえば、知的好奇心を刺激され、より一層深い楽しみ方ができます。現在、面河山岳博物館の学芸員による団体向けのガイドサービスが行われていますが、認知度・利用度ともに高くないのが現状です。

また、「面河少年自然の家」が閉鎖される以前は、数多くの子どもたちが自然体験・自然学習のために面河溪を訪れており、学校行事の楽しい思い出とともに面河溪を記憶に留めている人は、少なくないと考えられます。

面河溪を愛する会をはじめ、面河溪の環境整備に取り組む団体や地域の方々の活動を中心に、面河溪の環境保全・整備が支えられているのが現状ですが、基本的に無償によるものであり、マンパワー等の面において課題もあります。継続的な保全を行っていくための方策の1つとして、これらの活動自体を「エコツーリズム」のメニューとして位置付け、広く参加者を募ることで、興味を持つ人の輪を広げていくことも効果的と考えられます。

(3) エコツーリズムプラン造成等の必要性

面河エリアの目指すコンセプトに基づき、面河溪の再整備にあたっては、観光によってその資源が損なわれることがないよう、適切な管理に基づく環境の保全を図っていく必要があります。そのためには、それを担う人材と財源が必要であり、観光振興によって地域経済への波及効果が実現し、地域の暮らしが安定しなければ、優先的かつ継続的に保全をしていくことが難しくなります。

そこで、環境保全と観光振興のバランスを取りながら地域を活性化していくための方策として、面河溪の良さを最大限に生かしつつ、環境保全やエコの理念や活動を取り入れたツーリズムプランの造成や、それを企画・実行できるネイチャーガイド等の育成が効果的です。

面河溪再整備計画

地域の資源・評価されている点	地域の課題・改善点
<ul style="list-style-type: none">・豊かな生態系や季節ごとの変化など、自然景観の魅力は高い。・かつての少年自然の家での体験は、県内の子どもにも多くの思い出を残した。・キャニオニング、自転車など新たな楽しみ方が登場している。	<ul style="list-style-type: none">・説明・ガイドが不十分なため、面河溪の魅力や楽しみ方が伝わっていない。・キャニオニングに続く新たな体験プログラムの開発が進んでいない。・環境保全に取り組む地域活動の先細りが懸念される。

面河溪の課題を克服し、地域の魅力をさらに高めるために

地域住民が考える面河溪の魅力を最大限に引き出し、訪れる人に伝えるための
エコツーリズムプランの造成、ネイチャーガイドの育成

4-4-2 エコツーリズムプランの造成及びネイチャーガイドの育成の方向性

エコツーリズムのプランの造成にあたり、プランの造成自体が、面河溪をより深く知り、その魅力を発見する機会となります。そこで、面河溪に関わる人々の知識や見解を取り入れながらプランを造成していきます。また、ネイチャーガイド育成プログラムの中で実際に現地を歩きながらプランを作り上げていくなど、プラン造成とガイド育成を並行して行うことで、地域の人々が考える「面河溪の楽しみ方」を商品化していきます。さらに、商品化したプランの魅力を継続的に高めていくために、PDCAサイクルに基づき、モニターツアー等を行いながら、ブラッシュアップを図ります。

ネイチャーガイドの育成にあたっては、面河山岳博物館が蓄積している面河溪の地形や地質、生態系などの学術的な調査の成果や学芸員のガイドのノウハウを活用しつつ、面河地区地域運営協議会、面河溪を愛する会などの地域の活動とも連携し、育成を図ります。

面河溪再整備計画

ツーリズムプラン(例)

メニュー例	季節	主な対象
ガイド付きウォーク（地質編、植物編、動物編 etc.）	季節、テーマ、対象ごとにコース開発	
ガイド付きポタリング（同上）	同上	
自然を撮影する写真講座（フォトコンと連携）	オールシーズン	成人
植物採集とそれを使ったクラフト作り	春～秋	子ども・家族
アウトドアサバイバル体験	春～秋	子ども・家族
星空観測	春～秋	全年齢
納涼川床	夏	全年齢
環境ボランティア体験（清掃&環境学習）	オールシーズン	全年齢



4-5 プラン3 ■ 久万高原町・面河エリアの産品を活用した「食」、「お土産品」の開発

4-5-1 地域の特産品の現状

観光振興にとって、その地域の「食」や「お土産品」の果たす役割は非常に大きいと考えられます。

観光客の多くは、その地域ならではの特色ある「食」や「お土産品」を求めて地域を訪れ、その「食」や「お土産品」に対する満足度や評価が高ければ、その思いをSNS等で共有したり、地域の「食」、「お土産品」のファンになったりし、ひいては地域そのものを好きになることが考えられます。

面河エリアには、以下に示すような地域の食材を活用し、観光客からの評判もよい郷土料理や特産品があり、最近では、かつて栽培されていたウーロン茶の栽培を復活させ、特産品の一つとして売り出そうという動きもあります。しかしながら、面河溪の対象区域内には、飲食、購買スポットとして溪泉亭・面河茶屋しかなく、区域外においても「おもご ふるさとの駅」に限られているのが現状です。



こんにゃく



さんしょみそ



ウーロン茶



面河定食

面河溪再整備計画

4-5-2 地域の「食」「特産品」の開発

まずは、面河溪の歴史や文化を深く知ってもらい、訪れる観光客の満足度を高めていくため、地域の方々と連携を図りながら、地域の農産物や魚、郷土料理、伝統的な家庭料理などの掘り起こしを行います。掘り起こしの活動自体を体験メニューに組み入れ、地域の方々との交流のきっかけとしていきます。

こんにゃくや川魚などは、従来の田舎料理だけでなく、テイクアウトして散策中にも楽しめるよう、軽食メニューなどに利用することも検討します。

地域活動の中で商品化が試行されているお茶に関しては、面河ならではの強みを強化するため、面河溪の水質に合う茶葉、給茶方法などの研究や、緑茶や紅茶などのバリエーションの増加を図り、新たに整備する拠点施設での提供を検討します。

なお、上記の実践にあたっては、面河溪の環境汚染とならないよう、包装の素材やゴミの始末には細心の注意を払います。

本町の基幹産業である林業に関しては、地域内に立地する木工品の工房を始め、町内外の作家との連携等を図り、本町産の木材を用いた土産品や木製の知育玩具などを開発します。新たに整備する拠点施設等において、木製のアクセサリや雑貨などを手づくりするワークショップを開催することも検討します。

4-6 プラン4 周辺環境の整備

4-6-1 自然環境・景観の現状

(1) 景観調査の実施

本計画の策定にあたり、面河溪の観光資源、自然環境、景観の現状、課題等を明らかにすることを目的として、下記のとおり調査を実施しました。

(2) 調査方法

まず、散策ガイド等で案内されている景観資源、施設を抽出し、調査ルートとして4ルートを設定しました。

その上で、複数名の調査員が案内役による案内のもと、ルートごとに上記資源等を調査し、気づいた点等を写真撮影、記述しました。

(3) 調査ルート

ルート1 関門～五色河原



ルート2 面河川本流ルート



ルート3 鉄砲石川ルート



ルート4 展望台ルート



面河溪再整備計画

(4) 調査日時

2018年10月3日(水) 9時～12時(ルート1・ルート3) ※調査員6名全員で調査実施
13時～15時(ルート2・ルート4) ※2班に分かれて調査実施

(5) 調査体制

調査員 久万高原町 2名(ふるさと創生課)
受託事業者 4名((株)JTB、(株)矢野経済研究所、(株)いよぎん地域経済研究センター)
案内役 面河溪を愛する会 白石会長、久万高原町山岳博物館 矢野学芸員

(6) 調査結果

評価点

- 面河溪谷の景観資源については、大雨の後ということもあったため、水量も多く、見ごたえのある美しい場所が多かった。
- 調査開始前に、矢野学芸員から面河溪谷の成り立ち・地質等について説明を受け、かつ、調査時にも地形や植生などについて説明を聞きながら評価を行ったことから、ただ景色を見るだけではない楽しみ方を味わうことができた。
- 溪泉亭・面河茶屋からは亀腹岩や五色河原の景色がよく見え、地域の食材を活用するなどのこだわりも感じられる。

課題点

- ▲遊歩道は一定程度整備されており、散策が困難な場所などは見当たらなかったものの、全体的に樹木が鬱そうとしており、ビューポイントでさえも、景色が見えにくかったり、近くに寄って見ることができなかつたりする状況となっている。国定公園等の指定を受けているため、樹木の伐採等が容易でないことは理解しているが、今後も景観を売りとしていくのであれば、改善に向けて、国・県への働きかけ等が望ましいと考えられる。
- ▲見どころとされている各ポイントについて、ガイドによる案内や説明がないとどの場所を指しているのか分からないという所が多い。案内板があっても特に解説はなく、せっかくの良さが十分に伝わっていない。
- ▲駐車場不足、トイレ不足(あっても汚れ等で使いたくない)が課題である。
- ▲関門の遊歩道への入口が分かりにくく、初めて訪れる人には分かりにくいように思われる。

面河溪再整備計画

4-6-2 対象区域内の各施設における環境の整備

観光客を受け入れる上で、手入れが行き届いていない、数が不足している等により、満足度を著しく損なうような部分(例、トイレ等)について、順次、改修や増設を行っていきます。

[対象箇所]

- ・面河山岳博物館のトイレ
- ・溪泉亭・面河茶屋のトイレ
- ・キャンプ場のトイレ、キャンプ用設備



4-6-3 自然環境の景観回復に向けた取り組み

自然公園法に基づく規制や制限を満たすことを前提に、国指定名勝としての景観美を維持していくため、地域で活動している団体等と連携し、老朽化した看板、灰皿等の撤去に取り組むとともに、ビュースポット周辺の環境整備を行います。



面河溪再整備計画

4-7 面河溪再整備のKPI

「久万高原町観光振興計画」に定められたKPIを踏まえつつ、環境保護を優先し、観光客/観光消費の増加を一義的な目標としない面河溪観光のコンセプトを考慮し、計画期間中の達成を目指す面河溪再整備に関する2023年のKPIを以下のように定めます。

「面河溪再整備計画に係る2023年の各種KPI」

観光入込客数	2,000人増	域内観光消費額	10,000千円増
インバンド観光客	100人増	雇用者数	2人増

参考 久万高原町観光振興計画で定めたKPI

KPI	2017年 (基準年)	2020年	2023年	2028年
1 入込客数				
1-1 日本人	1,662,592人	1,874,467人	2,085,643人	2,336,199人
1-2 インバウンド (延べ宿泊人数)	※有効な数値なし	1,500人	2,000人	3,000人
2 観光消費額	27.3億円	33.2億円	39.4億円	46.5億円

※1 KPI2の観光消費額については、現時点で正確な統計データが存在しないために、2018年現在の観光入込客数と、減少していく人口と連動した内需減少分から逆算した値となっています。そのため、今後の調査結果においてはこの数値は修正される可能性があります。

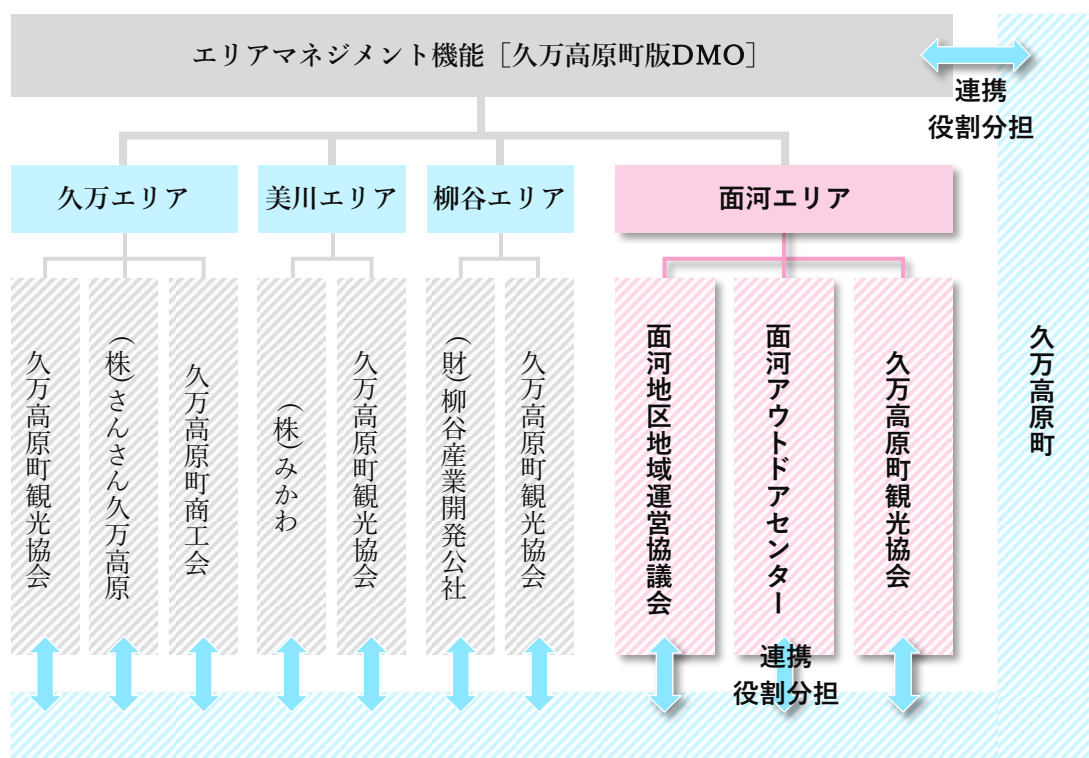
※2 経済波及効果は、株式会社価値総合研究所の提供する「地域経済循環分析用データ」を活用し作成された「久万高原町地域経済波及効果分析ツール」により算出しました。

※3 インバウンド観光客に関しては、統計が存在していないため推定値であり、今後の調査結果を反映することによって数値を更新する可能性があります。

第5章 推進体制

「久万高原町観光振興計画(2019.3)」では、観光振興に向けた4つの戦略の1つとして、「実施体制整備(久万高原町版DMOの設立)」を掲げており、町内の各エリアで主に活動する主体と、全体をマネジメントする組織(DMO)の2段階の階層構造で取り組むこととしています。

面河エリアの主な活動主体としては、面河地区地域運営協議会、面河アウトドアセンター、久万高原町観光協会を想定しており、本計画で定めたアクションプランの実践にあたっては、これらの地域団体等との密な連携及び役割分担を図りながら、検討を行います。



以下、連携・役割分担に向けた素案です(あくまで素案で変更の可能性があります)。

上記実施体制の中で、「面河地区地域運営協議会」は、地域住民の意見の集約や提案、また地域住民主体の特産品開発や観光プラン開発、イベントの発案などを他の連携主体に提案していく役割から、地域のボランティア組織等の調整役等の役割を担います。また「久万高原町観光協会」は、こうした地域発の様々な施策を対外的に情報発信する他、観光客の受付・ランドオペレーションなど、観光に係るオペレーションを担当します。また他エリアとの連携施策の提案等も行います。更に「面河アウトドアセンター」は、今後建設が予定されている「エコツーリズム・交流の拠点となる施設」の運営等の役割を担います。